

—グラビア—

Peutz-Jeghers 症候群の小腸ポリープ

藤森 俊二 江原 彰仁 小林 剛 瀬尾 継彦
三井 啓吾 田中 周 辰口 篤志 坂本 長逸

日本医科大学大学院医学研究科病態制御腫瘍内科学

Small Intestinal Polyps of Peutz-Jeghers Syndrome

Shunji Fujimori, Akihito Ehara, Tsuyoshi Kobayashi, Tsuguhiko Seo, Keigo Mitsui,

Shu Tanaka, Atsushi Tatsuguchi and Choitsu Sakamoto

Department of Pathophysiological Management/Medical Oncology, Graduate School of Medicine, Nippon Medical School

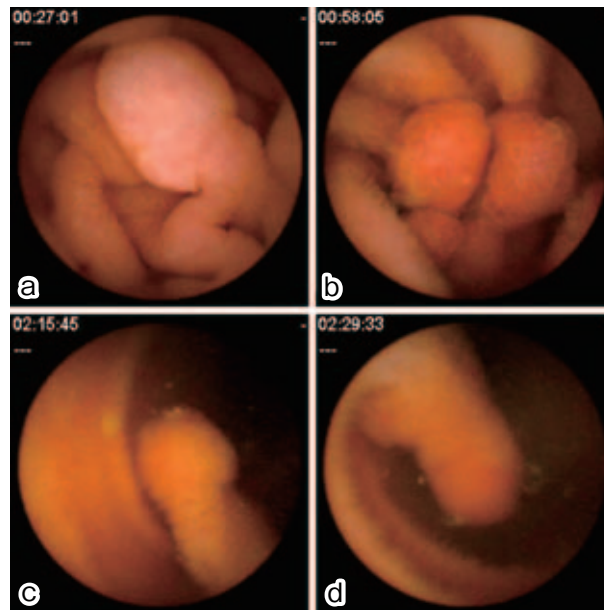


Fig. 1

本症候群は胃から大腸に多発ポリープを生じ、口腔や口唇、指趾に色素沈着を伴う常染色体優性遺伝疾患である。本症候群のポリープは過誤腫であるが大型化に伴い悪性化する。3 cm 以上のポリープでは 15% に悪性化がみられたとの報告もある。従来、胃および大腸のポリープは内視鏡的に治療が可能であったが、小腸ポリープは大型化したポリープによるイレウスなどで手術した際に術中内視鏡によって治療することが大半で、観血的な治療が避けられなかった。近年、小腸内視鏡技術はカプセル内視鏡とダブルバルーン内視鏡の出現により飛躍的に進歩した。カプセル内視鏡により患者に負担をかけることなく小腸の内視鏡画像を得ることができる。そのカプセル内視鏡の画像から切

除すべきポリープの存在がわかればダブルバルーン内視鏡を施行する。ダブルバルーン内視鏡は、口側および肛門側から挿入して癒着や閉塞のないほとんどの症例で全小腸観察が可能で、同時にポリペクミーなどの処置を行うことができる。Fig. 1 は Peutz-Jeghers 症候群の 42 歳女性のカプセル内視鏡で、多彩なポリープが小腸に認められた。Fig. 2 はそのダブルバルーン内視鏡像で Fig. 2a~c にポリープ写真を示した。Fig. 2d はポリープを切除後に止血用のクリップを付けた内視鏡画像である。同様に Fig. 3 は同症候群 26 歳女性で同様に多彩なポリープが認められた。同様に Fig. 4a~c ダブルバルーン内視鏡像で Fig. 4d はポリープを切除している写真である。

連絡先：藤森俊二 〒113-8603 東京都文京区千駄木 1-1-5 日本医科大学内科学（血液・消化器・内分泌代謝部門）

E-mail: s-fujimori@nms.ac.jp

Journal Website (<http://www.nms.ac.jp/jmanms/>)

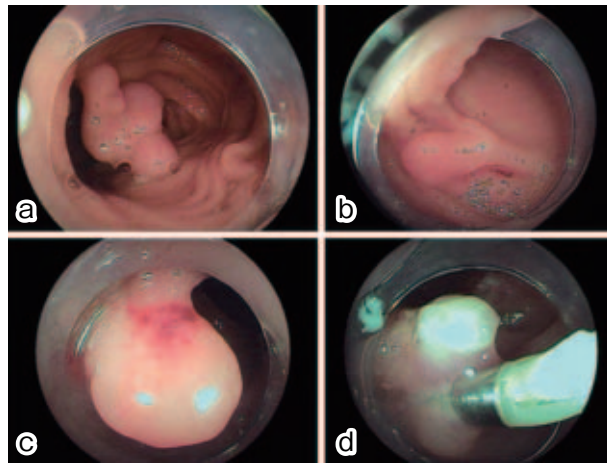


Fig. 2

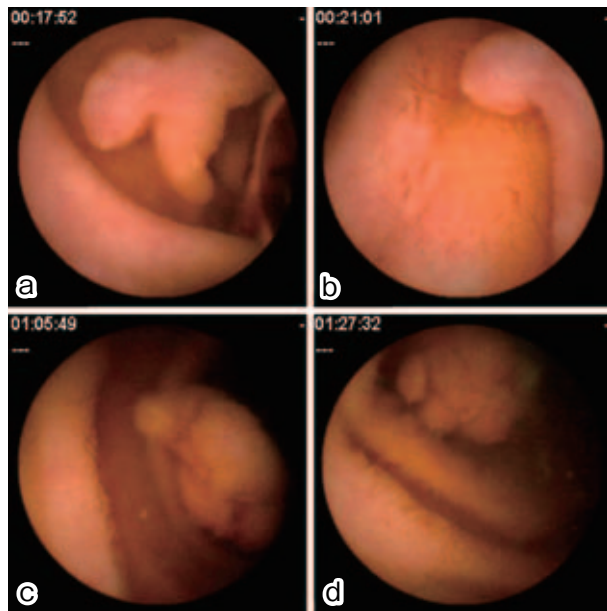


Fig. 3

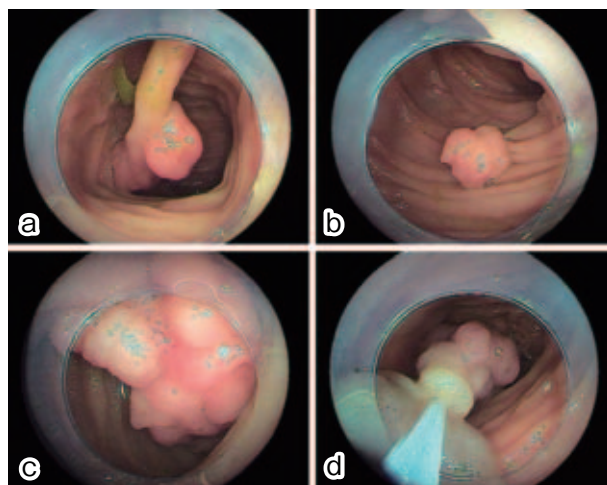


Fig. 4